

地域連携プロジェクト研究  
〔研究論文〕

地域活性化活動による地元住民とその支援者の意欲  
— 仙台市西部地区を対象とした QOL の向上を目指した実践的研究より —

伊藤美由紀<sup>1)</sup>, 畠山 雄豪<sup>1)</sup>, 小嶋 三男<sup>2)</sup>

Motivation of local residents and their supporters through community  
revitalization activities

— A practical study aimed at improving QOL in the western part of Sendai City —

ITO Miyuki<sup>1)</sup>, HATAKEYAMA Yugo<sup>1)</sup>, OJIMA Mitsuo<sup>2)</sup>

Abstract

In depopulated areas, in order for elderly residents to continue to live with a willingness to live in health, it is necessary to support the local activities of independent local residents. If the elderly work in the community, they can help each other in their lives. The elderly can maintain their health by being recognized for their activities and taking pride in themselves and their communities. University students were able to learn about the challenges of revitalizing depopulated areas and propose the necessity of support and solutions.

1. はじめに

1.1 過疎化高齢化の課題を抱える地域での地域住民と都市住民との交流

近年わが国では、首都圏一極集中による地方の過疎化が深刻化している。コミュニティの人口が減少し QOL の維持ができなくなる状態が進行する地域が増えており、仙台市太白区秋保町の野尻町内会も中山間地に位置し、高齢化や過疎化による次世代の担い手不足などの課題を抱えた地域である。本学科の地域安全安心センターでは、2011 年より野尻地区で開催する各種イベントなどに公的機関（仙台市秋保総合支所）と、住民らの QOL の維持や向上を目指し協働で取り組んできた。

---

1) 東北工業大学 ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科

Department of Life Design for Safety and Amenity, Faculty of Life Design, Tohoku Institute of Technology: Teaching Staff

2) 東北工業大学 工学部 都市マネジメント学科

Department of Civil Engineering and Management, Faculty of Engineering, Tohoku Institute of Technology: Research scientist

これまでの活動を通じて、野尻町内会では、地域の資源を活用し交流人口を増やそうとイベントを見直し企画運営するために、2016年10月に「野尻いぐる会」を主体的に発足した。この会は本学を始め協力団体の力をかりながら、地域住民と都市住民との交流活動、健康や環境などに考慮した新たなライフスタイルに着目した体験型観光の創出などに取り組んでいる。

このような活動を協働で実施していく体制の中に信頼や協力関係が意識されれば、住民の健康を増進させることにつながると考える。反対に過疎化などによる社会的孤立は健康に対して有害に働くと考えられる。また住民らは、子どもや孫が地域を離れ、自然や文化、知恵や技を伝承することが出来ずにいる。学生や子どもなど次世代に継承することによって健康のスピリチュアル面（生きる意味や価値）が充実すると考える。

## 1.2 過疎化高齢化の課題に対する若者の認識

我が国で進んでいる少子高齢化や人口減少は、次世代の担い手である若者にとってマイナスのイメージを抱きがちである。少ない若者が多くの高齢者を支えなければならないことが示され、若者にとっては労働力不足や経済的な負担などを感じるようになり、高齢者にとっては役割を見失い肩身の狭い思いをすることにつながる恐れさえある。

このような社会で、主体的に活動する「野尻いぐる会」と本学の学生らが活動を共にすることは、過疎化高齢化社会にマイナスのイメージだけを持つのではなく、プラスのイメージや現状を把握した上での課題を認識するようになる。このような活動での学びからは、今後の企業や社会活動の中で活かされると考える。

## 1.3 本研究の目的

本研究では、学生らと共に過疎化高齢化の進む秋保町野尻地区のまちづくり活動に参画しながら、1) 地域住民のまちづくりや日々の生活に対する意欲や課題、2) イベントに参加する地域外の都市住民の野尻に対する思いや今後のサポート意欲、3) 学生には活動参画による過疎化高齢化の進む地域での高齢者の役割や地域づくりに関する学びなどを明らかにすることを主目的としている。

## 2. 仙台市西部地区を対象とした住民のQOLの向上を目指したプロジェクトの内容

### 2.1 プロジェクト全体の概要と目的

仙台市の最西部、自然豊かな中山間地に位置する太白区秋保町野尻地域は、35世帯77名、高齢化率58.4%（2018年4月1日現在）の小さな集落であり、高齢化と人口減少による次世代の担い手不足などの課題を抱える地域である。そのような中、「自然豊かな野尻の特性を活かして、特産のそばや山菜を提供したり、山里暮らしの体験などを通して、野尻を訪れる方との交流の機会を増やし、地域を元気にしよう」との地域住民の声から「野尻いぐる会」が2016年10月に発足した。同時に「野尻いぐる会」を中心とした秋保野尻地区活性化事業も立案され、「野尻いぐる会」は様々な協力団体の力をかりながら、地元住民と地域外住民（都市住民）との交流活動、健康や環境などに考慮した新たなライフスタイルに着目した体験型観光の創出などに取り組んでいる（図1）。2017年10月には、野尻集会所の厨房を改修し、「野尻交流カフェ“ばんどころ”」として週末に地元住民主体で開店する他、様々なイベントの拠点として活用している。

本プロジェクトでは、2018年度の地元住民が主体的に取り組むまちづくり活動（季節のイベントや日常的なイベント）に学生と参画し、ワークショップ等も開催した。その際、地元住民、イベント参加者、参加学生に聞き取り調査やアンケート調査を実施する。調査により、地元住民の意欲や課題、地域外からのイベント参加者の野尻に対する思いや今後のサポート意欲、また学生は、高齢化と人口減少の課題を抱えた地域社会の現状を知り、高齢者や地域の自律（自立）に向けて考える能力の取得につなげた。

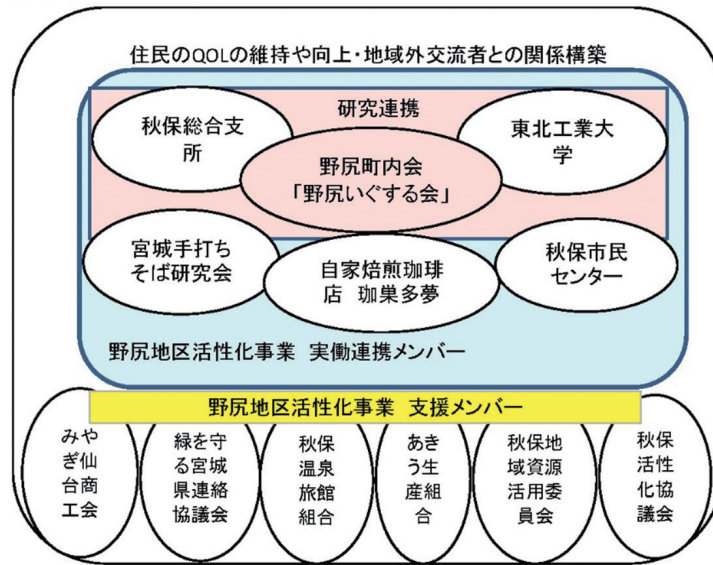


図1 野尻いぐする会を中心とした野尻地区活性化事業メンバー

## 2.2 地域外住民との季節ごとのイベント活動

野尻いぐする会を中心とした秋保野尻地区活性化事業では、都市住民などの地域外の方が、野尻の地域住民や豊かな自然との触れ合いを通じて、都会の生活では経験できない暮らしや文化を知る体験型のイベントを企画した。この企画は、自然豊かな野尻の特性を活かし、地域外の方々に特産の野尻そばや山菜などを提供したり、季節ごとの山里暮らしの体験を通して、地域内外の住民交流を促進させることを目指すものである。

### (1) 名取川清流野尻天神淵川遊び体験

夏には、野尻地区の北を流れる名取川清流野尻天神淵川遊び体験の活動に参画した。地域外から参加の親子には、都市生活では味わえない豊かな自然とのふれあい、山里の地域文化を感じてもらおう。「野尻の夏」を子どもたちとその親に体感してもらい、地域ブランドの向上と交流促進、自然体感空間創出による活性化につなげることも目的とし、実施した。

2018年7月14日（土）15日（日）に企画した野尻天神淵清流の川遊び体験に向けて、住民ら秋保野尻地区活性化事業のメンバーらと、県道（仙台山寺線）から天神淵まで通路を車両が入れるよう簡易整備するとともに、天神淵周辺の除草等を行い、四季折々の豊かな景観を見せる西部秋保の新たな観光資源の創出を4月から7月にかけて行った。

名取川清流天神淵川遊び体験の参加者は、14日は小学生とその親6組17名、15日は小学生とその親9組32名であった。活動場所は、野尻交流カフェ「ばんどころ」（野尻集会

所)と野尻天神淵とし、体験内容としては、魚とり体験(三日月網罟など)、水生生物採取観察、名取川で浸る・泳ぐ・潜る体験、カヌー体験、ドラム缶風呂体験、夏野菜(トマト・きゅうり等)の取れたて野菜丸かじり体験などを行った。

このイベントの学生の参加は、14日4名、15日14名であった。



図2 野尻天神淵清流での川遊び体験



図3 川遊び体験後の意見交換

## (2) 野尻の冬 雪遊び体験

冬は野尻地区の人々の生活の中では、雪は喜ばれることはあまりなく不便なものとして扱われている。その不便なものである雪に着目し、地域外の親子に豊かな自然の中での雪遊びを体験してもらい、雪遊びを教えるなどのふれあいを通じて、普段都市生活では味わえない雪深い冬の山里の地域文化を感じてもらおうこととした。「野尻の冬」を子どもたちとその親に体験してもらい、四季を通じて野尻に通うリピーターや野尻の自然を守るサポーターを増やすことも目的とし、実施した。

これまで約30年、野尻地区を会場に、秋保町全体の冬のイベントとして「雪んこまつり」を実施し、毎回千数百人の来場者が訪れていた。このイベントは秋保全体の町内会や子ども会、緑を守る会、活性化協議会などで協働で実施するイベントではあった(本学も2012年より参画)が、地元住民の高齢化や人口減少により負担も多くなり、開催内容について検討された。その結果、2018年2月より「雪遊び体験」として限定した親子を対象に実施するイベントとした。

イベントは、2019年2月9日(土)10日(日)に実施し、9日は小学生とその親5組16名、10日は小学生とその親7組28名であった。開催場所は、野尻交流カフェ「ばんどころ」(野尻集会所)と周辺地とし、体験内容としては、そりすべり、かんじき、かまくらづくり、雪像づくり、雪合戦、冬の郷土料理(はっと汁、餅つき、おにぎり)、たき火での焼き芋などを行った。

このイベントの学生の参加は、前日準備15名、9日13名、10日12名であった。

## (3) 季節ごとの体験イベント参加者の意見

各季節の体験イベント後の意見交換では、地域外の参加者から、「初めての体験が多くあった」、「普段、子どもが家では食べないものをここでは食べられた」、「住民や学生がいたので安心して楽しく遊ばせることができた」、「このような場所があることを知らなかった」、「次回の自然体験にも参加したい」、「子どもだけでなく大人も楽しめた」、「野尻交流

カフェ“ばんどころ”にも遊びに来たい」、「住民の方たちが優しくてうれしかった」、「自然の中で遊びを体験できる貴重なところ、このままがいい」、「もう何度も野尻に来てい  
る」、「年配の人が頑張っているので応援したくなる」、「手伝えることがあったら手伝いた  
い」などの意見があった。実際に、リピーターや以前の参加者から紹介されて参加する人  
がおり、中には昼食の準備や後片付け等を手伝う家族もあった。



図4 野尻地区での雪遊び体験



図5 かねがさ堰堤でのそりすべり

## 2.3 地域の特産物「野尻長寿そば」やその他の農作物などを活用した活動

### (1) 地域の特産物「野尻長寿そば」を活かした野尻新そばまつり

古くからそばの栽培と食文化が息づく秋保地域の野尻地区を訪れる地域外の方に、「野尻交流カフェ“ばんどころ”」や「野尻新そばまつり」を通じて地域の特産物の魅力を知ってもらおう。地域内外の交流を促進し、特産物などの情報発信することにより、更なる野尻地区の活性化を図ることを目的とし活動を行った。

第26回新そばまつりは、2018年11月3日（土）4日（日）に野尻交流カフェ「ばんどころ」（野尻集会所）で開催された。手打ちそばの他に、地元の農作物を使ったかき揚げや、そばねっけ揚げなどの野尻そばの食文化を知るメニューもあった。開催には、宮城手打ちそば研究会、秋保総合支所、秋保市民センター、秋保地域資源活用委員会、本学などが協力した。このイベントの学生の参加は、4日のみ10名であったが、他に「野尻交流カフェ“ばんどころ”」を利用した方や、季節の体験イベントに参加された方も協力しており、秋保野尻地区活性化事業を実施していく上での解決策への示唆が得られた。今後、野尻地域の自然や風景、風土などを理解し年間を通して応援する組織づくりが求められており、立ち上げに向けた意見もあった。

来場者は、3日は550名、4日は650名と合計1300名であった。今年より民家にも駐車できるということで、このイベントが野尻地区全体で取り組んでいるということが住民にも来場者にも浸透していた。屋外出店した団体の一部より、秋保産のそば粉やそばの実を活用した新たな商品開発をしたいとの話があり、新たな地産地消の動きにつながっている。



図6 第26回新そばまつり開始時ミーティング



図7 地元住民とエコステーションを担当

## (2) 今後の事業「ばんどころ農園」に向けた学生の農業体験

野尻地区は、兼業農家や各家庭が畑を持っており、農作物を育てる知識や技術を持つ人材は多くいるものの、人口減少や労働力不足により使用されていない畑や土地もある。そこで、地域外の方（都市住民）が通いで農作物を育てることは有り得るのか、検討することとした。

2018年8月7日、学生11名と共に兼業農家にて、農業体験を行った。体験内容は、畑



図8 きのこの植菌作業



図9 耕した後に大根の種まき



図10 収穫体験



図11 大学祭などで野菜の販売

を耕す作業、各種大根の種まき作業、きのこの種菌を原木に打ちこむ植菌作業を行った。

9月22日には同学生らと収穫体験、収穫した農産物や特産物の試食や後日販売等を行った。

### 3. 主体的な地元住民「野尻いぐする会」を中心とした活性化事業を通して

現地視察やイベント活動参画、「野尻いぐする会」のこれまでの取り組みの紹介、地元住民や支援団体とのワークショップ等により、地域住民のまちづくりや日々の生活に関する意欲や課題、イベント参加者の野尻に対する思いや今後のサポート意欲、また学生には過疎化高齢化の進む地域の現状を知り、高齢者や地域の自律（自立）に関する学びが明らかになった。

#### 3.1 地元住民のまちづくりや日々の生活に関する意欲や課題

地元住民の意見として、「イベントやカフェの運営する時に、来場者や参加者に満足してもらえるよう計画や目標を立てて臨んでいる。疲労感もあるが達成感を皆で味わうことができる。また役割があるため、元気でいなければならないという気持ちになる」など、地域のために活動を継続する意欲や日々の健康的な生活を意識することがみられた。一方で「イベント開催は地元住民に周知しているが、どのように参加できるか否かは、人それぞれ身体的な事情や仕事や家庭の予定等もあり様々である。野尻地区住民の一体感を味わってもらうために、そばまつりでは駐車場の貸し出しや新そばの配布などでつながりを意識している。しかし、住民間に活動に対する温度差はあり、時には意見の違いもある」とのことだった。

秋保野尻地区活性化事業のメンバーやその他の協力団体、参加者や来場者などとの連携に関しては、「多くの団体や個人が活動をサポートしてくれたり、野尻の自然に魅力を感じてくれたり、地元住民の活動を評価してくれることがありがたく、応援されると頑張れる」、「地元住民だけではイベントの運営が難しくなっている中、東北工業大学、宮城手打ちそば研究会、あきう生産組合などとの連携した取り組みも引き続き重要になってくる。良好な関係を今後も築いていきたい」との意見があった。

また今後に向けて、「参加者や出店者、学生等から今後の運営に関して提案や商品開発協力の申し出があり、検討していきたい」、「野尻交流カフェ“ばんどころ”を4月からは毎週末に営業したい。人手不足もあり、地元住民以外の応援も検討する」、「次年度からは農業体験『ばんどころ農園』を実施する」、「野尻の自然、風景、風土などをまるごと理解し応援する組織づくり（仮称野尻サポーターズ）が求められ、立ち上げに向けた取組みを検討する」など、まちづくりへの意欲や課題が聞かれた。

地元住民は参加人数や収入でイベントを評価するのではなく、住民や学生の声に耳を傾け、継続的なサポーターを求める活動を企画するようになった。さらにこのような活動は恒例のものとなりそれぞれが役割を持ち、地元で協働で取り組む意識が高まることにつながっている。地元住民が生活や自然に関して知恵と技を持ち若者などに伝授する一方で、若者が得意とする新しい機器の活用や情報発信などを若い力に期待する意見もあった。

#### 3.2 イベント参加者の野尻に対する思いや今後のサポート意欲

各季節の体験イベント参加者から、「豊かな自然の中で、普段都会では体験できないこ

とを子どもも親も体験できる貴重な場である」,「ここで体験することで少しでも子どもの成長(食べれる・できる・知るなど)が見られる」,「世代間交流により普段接しない世代との接し方,得られない情報などを得ることができる」など,野尻での体験の意義を述べたり,主体的に活動する地元住民とその取り組みに対して,高評価する参加者が多かった。

今後のについても「次回の自然体験にも参加する」,「野尻交流カフェ“ばんどころ”にも来たい」,「自然の中で遊びを体験できる貴重なところ。このままがいい」,「年配の人が頑張っているので応援したくなる」,「手伝えることがあったら手伝いたい」などの意見があり,実際に,リピーターや以前の参加者からの紹介で参加する人がおり,以前の活動を振り返り親しくコミュニケーションを取る場面がみられた。また地域外の参加者はもてなされる立場だけではなく,地元住民を気づかい準備や片付けなどに手を出すようになった。

イベントで出店した協力者からも次回の出店や地元の特産物を活かした商品開発の申し出があるなど,今後のサポート意欲が高まった声が多かった。

### 3.3 学生の過疎化高齢化地域や高齢者と地域の自律(自立)に関する学び

本プロジェクトにおける学生の参加は,安全安心生活デザイン学科1年21名,3年13名であった。学生には,活動参加後に自由記載のアンケート調査を実施した。質問内容は,野尻地区やイベントの現状や課題をどのように感じたかである。自由記載の内容をKJ法で分類した。

「野尻地区のプラス面」について,表1のとおり,【豊かな自然】【美味しい特産物】【周囲に観光地がある】【地元住民の優しさと一体感】【協働で運営する喜びを味わえる】【多世代交流の場】【貴重な体験ができる】【都会にはない再来したい場所】の8カテゴリがあった(表1)。

「野尻地区のマイナス面」については,表2のとおり,【過疎化が進む】【生活や移動が不便】【滞在できる場所がない】【情報発信に課題がある】【土地の魅力を活かしていない】【労働力不足】【移住にはサポートがない】【歴史や文化の継承がされない】【慣れない体験に怪我の恐れ】の9カテゴリがあった(表2)。

野尻地区のプラス面やマイナス面を受けた今後に向けての提案として,現在掲げているとおり交流人口を増やすことは多く出された。そのためには,豊かな農産物や特産物を活かした食の提供,都会では経験のできない体験型観光(農業体験や料理体験など)を通して地産地消・身土不二などの食育につなげることがあがった。体験型観光としては他に,「遊びや自然体験」,「時代を再現」,「プライベート空間の提供をしながら暮らすような旅」,「お試しサテライトオフィス」,「お試し移住」などが提案された。それには,情報の発信や宣伝に課題があるため,インターネットなど宣伝や販売,SNSなどで発信があげられた。子どもや若者に知ってもらい機会を増やすために街中で紹介する体験型の展示会の提案もあった。また目印・看板・サインをわかりやすくする必要性,都会との移動手段を確保するために「ツアーの企画」,空き家空き地等を活用した滞在や宿泊ができる場所の確保などもあった。それらに取り組むためには,地元住民だけでは困難なため,里山を守る会などのサポーターづくりがあげられた。さらに移住となると,引越し費用負担,子育て支援住宅など子育てにより環境を準備するなどの支援や,遠隔勤務ができる通信設備を整えたオフィスなどが必要だとの意見もあった。



表1 活動参画学生の感じた野尻地区のプラス面

カテゴリ	サブカテゴリ	データ
豊かな自然	自然に恵まれている	豊かな自然に環境に恵まれている、水切りを楽しめる、河原の散歩ができる、緑が豊か、水が良い、空気が良い、野菜を川で洗って食べられる、川で遊べる、川が近い
	季節を楽しめる	季節を楽しめる、山菜が取れる、紅葉を楽しめる、雪で遊べる
美味しい特産物	地元の特産物や食べ物が美味しい	「ばんどころ」メニューは美味しい、そばまつりには1500食が出る、地元の農作物で作ったお昼が美味しかった、地元の食材を使って出している、そばが美味しい、オリジナルブレンドがある
周囲に観光地がある	観光スポットがある	山寺への道が開通する、立ち寄ってもらえるところにある、秋保大滝には多くの観光客が訪れる
地元住民の優しさや一体感	「ばんどころ」がある	住民が運営している、住民が集う、知り合いが来る、リピーターが来る、誰かがいる、地元の食材を利用している、オリジナルブレンドがある
	元気で優しい住民	元気な住民、元気な高齢者、優しい住民、人柄がよい、優しく話しかけてくれた、笑顔が多かった
	地域の一体感がある	地域での交流がある、「ばんどころ」には住民も集まる、全員が協力している、コミュニケーションがとれている、野尻をどうにかしようという気持ちが伝わってくる
協働で運営する喜びを味わえる	協力者がいる	協力者がいる、協力してできた、皆で協力した、活動は成功した
	協力者と良好な関係	喜んでもらった、「また来てね」と住民に言われた、親睦を深めることができる
多世代交流の場	多世代交流の場となる	多世代交流の場となる、幅広い年代の人と接することができる、昔の話をしてもらった、子どもが訪問することで笑顔になる、子どもがいると元気になる
貴重な体験ができる	貴重な体験	普段は体験できないことを体験できる、貴重な体験、子どもと遊んだ、おにぎりを作った、川で遊んだ、学べた、普段関わらない文化に触れた、知らない土地の魅力を知れた、昔の話をしてもらった、初めて体験できることが多い
	農業体験できる	農業体験ができる、様々な野菜が栽培できる、大根抜きを体験できる、そば畑がある
	体験を活かせる	体験を活かせる、次回はもっとより良くしたい、大学での勉強もがんばりたい、楽しんでもらえるように頑張る、このような活動に参加したい、ボランティア活動などに積極的に参加したい、参加しているんなことを学びたい
都会にはない再来したい場所	癒される場所がある	癒される場所がある、心がきれいになった気がする、子どもに癒された、幸せな一日、落ち着ける
	再度来たくなる	自分たちも一緒に楽しめる、良い思い出を作る、自分も楽しみながらできた、再度来たくなる、また参加したくなる
	変わらないもの	変わりゆく中で変わらないもの、都会にはなくてそこのしかないもの

表2 活動参画学生の感じた野尻地区のマイナス面

カテゴリ	サブカテゴリ	データ
過疎化が進む	少子高齢化	高齢者が多い、高齢者の割合が高い、高齢化が進む、若者が少ない、子どもが少ない、小学生が一人しかいない、カフェの来場者も大体が大人でお年寄りが多く年齢層が偏っている
	人口減少	住民が少ない、人があまりいない、人口が少ない
生活や移動が不便	交通の便が悪い	仙台からの公共機関も全くとっていいほどない、道が悪い
	買い物に不便	買い物ができない、車でしかいけない、個人商店1つしかない、コンビニがない
滞在できる場所がない	宿泊できない	宿泊場所がない
	立ち寄り場所がない	立ち寄ってもらえる場所がない、素通りされてしまう
	空き家がある	人が住んでいない空き家などがある
情報発信に課題がある	情報が伝わってこない	宣伝が仙台市の街中にあるのか、SNSなどでの呼び込み不足、イベントやカフェの情報を知る機会がない、温泉街などに案内がない、子どもや若者が知らない、カフェの来場者も大体が大人でお年寄りが多く年齢層が偏っている
	目印・看板・サインがわかりにくい	道路など目に付くところにサインがない、場所がわかりづらい、温泉街などに看板がない
	観光名所との連携が悪い	観光名所をうまく活かしていない
土地の魅力を活かしていない	特産物を活かしていない	そばを打つ体験がない、特産物を収穫する企画がない、山菜メニューがない、特産物が見えにくい
	魅力が伝わりにくい	魅力が伝わらない、特徴がない、自然豊かなことが知られていない
労働力不足		来客が来て対応できる人力があるか、労働力不足、住民の負担が増加する、働き手不足、イベント開催など苦労していないか
移住にはサポートがない		野尻に仕事がない、移住に対して経済的支援がない
歴史や文化の継承がされない		文化の継承がされていない
慣れない体験に怪我の恐れ		遊びなれていないと危ない、怪我をするおそれ

#### 4. 考察

本研究により、地元住民は、参加者や協力者の声に耳を傾け、継続的なサポーターを求める活動を企画し、このような活動を継続して行うためにそれぞれが役割を持ち、協働で取り組む意識が高まることにつながっている。地域活動に参加している高齢者は、相互扶助、地域における生活支援の担い手として活動するといわれているとおり、野尻地区でイベント開催や交流カフェの運営をする地元住民たちは相互扶助の意識が高まっていることが予想された。

イベント参加者はリピーターが増え地元住民や参加者などと親しくコミュニケーションを取る場面があり、地元住民の活動を評価し運営に手を出す、意見を述べるなど野尻をサポートする姿勢が見られた。高齢者にとっての健康は「自分への誇りを持ち続けられること」と述べられている。都市住民などのイベント参加者や協力者から活動を評価されることにより、自身や地域に誇りを持つことにつながり、健康維持につながると考える。

また学生は、地元住民との交流から、野尻の資源を有効に活用できるように考え、地域の抱える課題解決に積極的に介入し、新しい試みや情報発信など提案した。住民同士や地域内外の交流、地域の特性を考慮したサポートの必要性を学ぶことができると考える。

#### 5. まとめと今後の課題

過疎化高齢化の課題を抱える地域において、地元住民が健康に意欲を持って生活をし続けるには、現在行われている主体的な地域活動を継続することが重要である。しかし、持続的な活動にするためには、今後も地元住民の活動や地域の価値を評価し、不足する労力や地域のマイナス面に対する支援方法を検討する必要がある。

#### 謝辞

プロジェクトを進めるにあたり、秋保町野尻地区の皆様、仙台市秋保総合支所を始めとする秋保野尻地区活性化事業の皆様、安全安心生活デザイン学科の学生の皆様、多くの方々にご理解とご協力をいただきました。参画して頂いた多くの方々に対し、心から感謝を申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 中津井貴子他 中山間地域に居住する高齢者の健康関連 QOL の実態 山口県立大学学術情報 第8号(大学院論集 通巻第16号) 2015年3月
- 2) 大森純子 高齢者にとっての健康:『誇りをもち続けられること』農村地域におけるエスノグラフィから 日本看護科学会誌 Vol.24 No.3 pp.12-20 2004
- 3) 山口初代他 沖縄県小離島のA島における高齢者の地域活動への参加と相互扶助 老年看護学 第23巻第1号 2018.7
- 4) 百瀬由美子 高齢者が主体的に生きることを支える老年看護学の探求 老年看護学 第19巻第1号 2014.11
- 5) 張 平平他 看護学生の感想レポートの分析からみた元気高齢者による講義の意義 老年看護学 第16巻第2号 2012.3